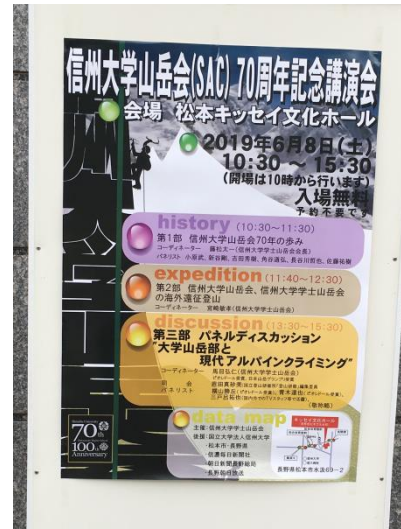


信州大学山岳会創立 70 周年記念講演会 抄録



キッセイ文化ホール



ポスター

信州大学山岳会創立 70 周年の一環として、「信州大学山岳会創立 70 周年記念講演会 - 信州大学山岳会 70 周年のあゆみと大学山岳部の将来展望 -」を、2019 年 6 月 8 日、松本市、キッセイ文化ホールにて開催した。

今回は三部構成で、信州大学山岳会の歩みや海外遠征登山の歴史、又、パネリストとして他大学の OB を御招きし、アルパインクライミングに関し活発なディスカッションが行われた。当日は、約 180 名の来場者があり成功裡に終了した。

内容の抄録は、以下の通りである。

●オープニング

司会者として全体コーディネーター・馬目弘仁（農学部 昭和 62 年～平成 2 年）が開会を宣言し、会長・藤松太一（教育学部 昭和 44 年～49 年）が挨拶を行った。



コーディネーター 馬目 弘仁



会長 藤松太一

藤松会長挨拶

本日は信州大学山岳会の紹介を行うとともに、70周年事業の一環として講演会を初めて行う事となった。現在、大学山岳会は低迷の一途にあるが、その中で、信州大学山岳会は活発であり、本日はOBも含め皆様に山の魅力を改めて伝えたい。

●第一部「信州大学山岳会70年の歩み」

コーディネーター 藤松太一

信州大学山岳会は、伊那、松本、長野、上田とそれぞれの学部所在地に分かれて活動していたが、1960年の統一新人合宿を契機に統一の機運が高まり1979年以降全学統一の組織となった。

その後も新人合宿は、徳本峠を越えて上高地に入り横尾に定着するというスタイルで行われている。



小原武（文理学部 昭和31年～35年）

旧制松本高等学校（以下「旧松高」）山岳部OBとの交流を中心に講演。昭和30年代当時は、殆ど旧松高山岳部OBとは殆ど交流が無かったが、旧松高出身の小林教授が山岳部顧問だった事やサマテンに来訪された旧松高・東北大学医学部出身の野口先生、京都山岳会長でディラン峰遠征隊長の小谷氏など個人的に交流を深めた。

会場からもOBの小林実から小谷氏を通して作家・北杜夫氏との交流も語られた。信大図書館には「小谷文庫」があるとのこと。



小原 武



新谷 剛



吉田秀樹

新谷剛（医学部 昭和37年～44年）

入学から山岳部に入り活動するまでの個人的な感想を述べた。入学当時は山に興味もなかったが思誠寮に入り「春寂寥」を歌い、雄大な北アルプス、とりわけ「常念岳」の雄姿に魅せられ、山岳部に入り年間180日も山行を行う様になった。その後は山岳部が自己を育ててくれ、信州大学山岳会に入る事が

宿命であったと思う様になった。

吉田秀樹（人文学部 昭和 47 年～56 年）

私が入学した 1972 年当時、山岳部の組織はある程度固まっており、伊那松本・上田・長野の三組織があり独自に活動し、その後、上田は長野と統合し上田長野山岳部となった。伊那松本・上田長野山岳部夫々にリーダー会があり暫く二つの組織で運営されていたが、新人合宿や合同岩トレは全学で行っていた。又、新人、春、夏、プレ冬合宿で鍛え、冬合宿で総合力を問うという方法とその他に個人山行を行うというスタイルは当時から変わっていない。

冬合宿では剣北方稜線や北仙人尾根から黒部を横断し剣岳登頂を画期的なものと記憶している（委員会注：信大全体（伊那松本および長野上田合同）で行った剣北方稜線縦走（1973 年 12 月 11 日～1974 年 1 月 3 日、僧ヶ岳から毛勝山を経て剣岳登頂）および黒部横断縦走（1977 年 12 月 16 日～1978 年 1 月 9 日、北仙人尾根から剣岳登頂後、往路下山（本隊）、遠見尾根から黒部を横断し剣岳登頂後、早月尾根下山（縦走隊））。又、1970 年後半は登山も多様化し、OB の中嶋岳志がアメリカヨセミテで得たクライミングの経験を伝えたこともあり、登山靴だけでなくラバーソールのクライミングシューズが出てきた。しかし高価なクライミングシューズは学生には買えず運動靴で岩を登っていた。



角谷道弘



長谷川哲也



佐藤祐樹

角谷道弘（農学部 昭和 58 年～63 年）

統一後の信州大学山岳会（SAC）で活動した。合宿や個人山行で様々な山に登ったが、在学中に 2 回もヒマラヤへ行く事ができた。春の不帰定・夏の熊ノ岩合宿は楽しかった。冬は厳しいものであったが、比較的人数が多く全員の力を結集した薬師～槍ヶ岳や杓子から黒姫等が記憶にある。当時は現在と違いGPSも無く、二万五千分の一地図とコンパスだけが頼りであった。



長谷川哲也（経済学部 平成 3 年～7 年）

山を指向して信州大学山岳会へ入り、3 年時に「クラウン」に登頂できた。クラウンは東南稜から上り途中で高山病になり一時ダウンしたが幸い登頂できた。

その後も様々な場所で岩を中心に登山を行ったが、北岳

バットレス、屏風岩、滝谷、明星山、谷川岳などが記憶にあり、当時も女性部員がいたが今年は初の女性リーダーと聞いて多様化を感じる。様々なことがあったが「とにかく山へ行こう」という気持ちで登っていた。今後もこの気持ちを継承して頂きたい。



佐藤祐樹（理学部 平成 12 年～17 年）

現在第一線で活躍している横山OBや花谷OBと同世代。2008年にはリーダー1名、2009年にはリーダー1名と1年生3人という危機的状況となったが、故田辺、横山、角谷といったOB諸氏の合宿参加というテコ入れで復活し、2015年冬合宿は20名の部員が槍ヶ岳に登頂する嬉しい結果となった。

今年は女子部員がリーダーという事で期待している。現在は、登山用具店に勤めているが登山の多様化や変化は激しくその中で現役学生は何を考えて登るのか見守ってゆきたい。

●第二部「信州大学山岳会、信州大学学士山岳会の海外遠征登山」

コーディネーター 宮崎敏孝前会長（農学部 昭和 37 年～41 年）

第二部では信州大学山岳会が行ってきたこれまでの海外遠征登山を資料と報告書の表紙を元に振り返り集約してみたい。

1967年の初回ネパール偵察登山から始まり、1971年アンナプルナ、初登頂としてジェティボフラニ、ニルギリ、ネパール警察と合同の1994年ギャジカン、1996年ラトナチュリ、60周年のカンテガ北壁等、又、カトマンズから望遠できるガネッシュヒマールⅡ峰には3回も遠征隊を出してきた。

今日は、最初の海外遠征隊のメンバーであった佐藤OB、藤松会長、故小川OBと共にヒマラヤ登山を推進してきた渡部OB、20～60周年の間事務局を務めてきた宮崎の視点から議論し、配布資料に年代順にまとめたものを「台帳」として今後引き継いでゆきたい。



宮崎敏孝



佐藤邦彦



藤松太一（左）、渡部光則（右）

佐藤邦彦（昭和 37 年～42 年）

当時、山岳会は三分割されていたが、それぞれの部から海外登山に関心のあるものが集まり海外登山研究会が発足。ネパールは登山禁止の時代であったが偵察を主目的とし、信州大学山岳会として初めてメンバー4 名で横浜から渡航した。1967 年に横浜港から船でボンベイを目的に出航したもののイスラエル・エジプト戦争の影響で、セイロンでの下船を余儀なくされ、インドへ渡り、陸路でネパールに到達した。日本出国後、一か月が経っていた。ネパールには四か月滞在し、佐藤・望月でニルギリ周辺を、小川・米倉がガネッシュ周辺を探索した。当時、飛行機は余りにも高額で使えず、外貨持ち出し額も規制があった。気軽に外国へ行ける現在とは隔世の感がある。

宮崎：遠征経験の多い藤松会長に「休暇の取り方」を伺いたい。

藤松：在職当時は中学校の教員をしていた。1978 年の遠征時は、長野県の教育長に理解があった。1994 年の時も上田市の教育長の理解があり実現した。2009 年は代わりの教員を自ら探し年休を使い行ったが、いずれの場合も、遠征中は代わりの教員が配置されるわけで周囲の理解が必要。不可能と思わずチャレンジして欲しい。

宮崎：藤松会長はニルギリに初登頂している。次に、ヒムルンヒマール等を調査し、ネパール警察登山隊との合同登山を実現させた渡部OBに、許可申請や交渉の実態を伺いたい。

渡部光則（昭和 45 年～51 年）

1992 年、故田辺、河西両OBにアンナプルナⅡ峰北陵の偵察に行かせたが、その折にペリヒマールの偵察と、個人的に未踏峰五座の申請を依頼した。両名が現地に向かったところ、ヒムルンヒマール北峰に北大が入山して初登頂しており、ヒムルンヒマールと呼ばれていることがわかった。弘前大が初登頂したヒムルンヒマールは現在ネムジュンと呼ばれている。

申請した5 座の内、ヒムルンヒマール北峰と西峰と呼んだギャジカン、渡部が1973 年ガネッシュヒマール偵察後、ブリガンダキを遡りラルキャ・ラから遠望した山々で、当時入れなかったナル・コーラ上流のペリヒマール主峰ラトナチュリを知っていた。

ギャジカンとラトナチュリは未踏峰なため、ネパールとの合同登山が要求された。ネパールの公的登山団体としては、ネパール陸軍とネパール警察登山探検財団があるが、日本との合同登山の実績がある内務省管轄の後者を選び、1993 年に故小川OBとネパールへ交渉に行った折、国境から離れたギャジカンの許可がとれた。国境稜線上のラトナチュリの許可取得は、北京との国境画定協定を結ぶ必要があり難航したが、ネパール政府と警察の協力を得て、ギャジカン、ラトナチュリの合同登山を行う事ができた。

宮崎：海外遠征登山をまとめた表を見てどの様に感じるか。

渡部：ヒマラヤは一回行くと、二回、三回と行くようになる。又、他団体に所属して登山するOBも多く層が厚い。

佐藤：ネパールに行くと本格登山ではなくても欧米人は多い。日本人も「自然に親しむ」という観点を
持ってもらいたい。

藤松：最近は「四季遊山」ということで、野山に泊まり、たき火を楽しむ事が多い。「自然に親しむ」事
が大事と感じる。

宮崎：故小川OBは、ネパールトレッキングを組織・実行することが大変上手で、その根源にあるもの
は自分が見たネパールの素晴らしい自然を知ってもらいたいという事に根差していた。

渡部：現在のヒマラヤ登山はアルパインスタイルが主流の様だが、信州大学山岳会ではこれまで殆ど包
囲法、極地法で行ってきた。極地法とは言ってもベースキャンプから上はシェルパレスにて自分
たちで全てを行い、全員登頂を目指すスタイルである。

宮崎：本日は残念ながら、花谷OBは欠席だが、彼は、他大学の山岳部員を募り「ヒマラヤキャンプ」
を行っている。

●第三部 「大学山岳部とアルパインクライミング」

オープニング

馬目：第三部は「大学山岳部とアルパインクライミング」と題して難しいテーマだが、司会に上智大学
山岳部OBの恩田真砂美氏（国立登山研修所「登山研修」編集委員）、パネラーとして東海大学山
岳部OBの青木達哉氏、明治大学山岳部OBの三戸呂拓也氏、及び信州大学山岳会OBの横山勝
丘を迎えてプレゼンテーションと討論を行う。



恩田真砂美氏



パネルディスカッション

○第三部前半

恩田：信州大学山岳会は三名のピオレドール受賞者を輩出し、うち二名が本日のパネラーです。馬目氏
から提示された今回のテーマを語るに、これ以上ない貴重な機会である。楽しさの裏には失敗や

死というリスクがある。大学は本来学業をすべき場であり、大学の山岳会（山岳部）はこれらのリスクは絶対避けねばならない。他大学の山岳会（山岳部）出身者で、かつアルパインクライミングを実践するパネラーを交えて、一緒に考える場としたい。



三戸呂拓也氏



青木達哉氏



横山勝丘

横山：何に魅力を感じて山に登っているのかという観点で述べてみたい。小学生の頃、偶然見た山岳雑誌の穂高の写真を見て以来、中学・高校と登山を行ってきた。そのまま信州大学山岳会に入り、ヨセミテ・エルキャピタン、国内の冬壁の登攀も行った。その後、2005年以降はアラスカやパタゴニアでアルパインクライミングを推進した。アルパインクライミングについては、氷や岩の登攀は手段であり、「山の中でのクライミング」と自身で定義している。又、ルートは自分たちの表現としての産物であり人間活動や創造的な行為である。家族というクライミング以外の価値もあるが、「未知へ挑む、知る行為は人間の本質ではないか」と考える。

恩田：アルパインクライミングとは「未知へ挑む、知る行為」という人間の本質的欲求を山の中で表現する創造的な行為だということですね。



三戸呂：信濃大町で育ち高校では山岳部でインターハイにも出場した。明大山岳部では年5～6回の合宿で年間100日前後を山で生活し厳冬期登山を最終目的として活動している。明大の特徴は、年度計画が堅固に組まれ、行動もマニュアル化されている点である。その理由は、リーダーの判断基準を統一し、4年間で初心者为基础が出来上がった登山者に育成するためである。

自身は20回以上の海外登山経験と7000m級の未踏ルートや未踏峰の経験があり最近のアスリートカメラマンとして映像作品の作成にも携わっている。

恩田：明治大学山岳部では、登山に内在するリスクを前提としたうえで、しっかりと基礎を身に着けるために高度にシステム化し運営されているということですね。

青木：東海大学入学前は、サッカーを行っていたが、入学後、ゴールデンウィーク（GW）の北アルプス前穂高岳に登山し山の魅力にはまった。東海大学では、GW、岩、夏（縦走と岩）、冬の剣合宿を目標に活動していた。大学2年時にはパミール、4年時にはK2登山に参加した。

「自由度」という観点からは、東海大は、明大と信大の中間あたりかと思う。大学では既存ルートを登攀する事が多く、ナチュラルプロテクションを駆使してルート開拓を行う登山をすると同じ山を見ても違ったラインが見えてくる。

横山：信州大学山岳会の自由度を強調したが、自由ではあっても基本は厳しく学ぶという事で誤解なき様をお願いしたい。

三戸呂：大学山岳部の弱点は1～2年程度の経験のリーダーでも下級生を連れて山へ行くのでリスク管理が求められる事と思う。行動をマニュアル化する事である水準は保てるが、行きすぎると自発的な目標を見失うことがある。学生の自主性とリスク管理の弱点をカバーする方法が必要。

会場から質問：上智大はどうか？

恩田：東海大に近いと感じる。リーダーは冬合宿を目標に、GW、岩、夏（縦走と岩）、冬の合宿を組む。岩も劔や穂高などの既存ルートを登っていた。

横山：登山研修所の講師をしていると、関東の大学山岳部の学生は基礎ができていると感じる事が多い。

○第三部後半

恩田：後半は馬目氏にも加わってもらい、①現代のアルパインクライミングとは、②大学山岳部とは、③大学山岳部とアルパインクライミング、のテーマで討論したい。

馬目：アルパインクライミングとは「冒険的登山」と置き換えができると思う。未知の領域を自らの力で切り開くという意味で。

横山：アルパインクライミングの意味は多様化している。地理的空白を埋める未踏峰は無くなったが、垂直方向の壁には未踏の部分が多くある。これらを探究することがアルパインの神髄ではないか。フィッツロイトラバースも未踏のルートではなく連続させることに意義がある。



青木：現在はSNS等で情報はすぐ拡散し、より高く未知を求める事は困難な時代。よって多様化せざるを得ないが、自身の中での「未知」でも有意義ではないか。

三戸呂：アルパインクライミングを「冒険的」と定義すると、何処から冒険なのか各人各様。求める対象が時代とともに変化

し未踏峰から壁やルートに変わり登山がスタイリッシュになった。

恩田：ピオレドールを受賞したパネラーもいるので敢えて伺いたいですが、アルパインクライミングにおける評価についてどう考えるか？

横山：評価の必要性を感じない。「山の中のクライミング」と「知らない事を知る」事が本質なので。

馬目：京大の今西錦司先生が、エベレストが登頂された時に「これで自由な登山ができる」と言われたことがある。又、明大OBでもある植村直己さんは「生きて帰る事が冒険」と言っている。

青木：スポーツ系のクライミングはグレード化や点数化がされるが、アルパインクライミングとは全く別物と考え評価は困難。

三戸呂：自身が作成した動画を観てもらふ事は有り難いが登山は自己満足でありたい。評価を求めるものではない。

横山：評価を求めている時期もあったが、アルパインクライミングを深く行ってゆくと必要なしと思えてくる。



恩田：これまでの議論でアルパインクライミングの概念は多様化していることが理解できた。

馬目：「リスク」をどう考えるか各人に訊きたい。

青木：クライミング中は「死と隣り合わせ」という感覚は無い。集中している時は判らないが全体的にはリスク管理が必要。

横山：これまでクライミングが楽しい事が上回りリスクに関し深刻に考えたことはなかったが家族が来たこともあり、クライミングに行くにはリスク軽減を考える事必要と感じる。

三戸呂：リスクをゼロにはできないが努力しなければならない。

恩田：「大学山岳部」について聞きたい。良い点、悪い点はなにか。

馬目：高校時代から登山を行い、大学入学後は直ぐに岩登りを行いたかったので社会人山岳会に入った。

横山：自分には信州大学山岳会しか選択肢はなかった。欠点は余り無いが4年間で一人前になるには時間が無い。又、リーダーの資質の有無が検証されることなく上級生がリーダーになり下級生を

危険な目に遭わせる危険性もあり。

青木：1年でも学ぶことは多い。山を広く学び基礎を身に着ける事ができる。反面、伝統により行動範囲が狭められる欠点も。

三戸呂：メリットは4年間で基礎が確立しまとまった日数の山行で体力と底力が養われる事である。

デメリットは3~4年でリーダーとなった者が新人を連れて正しい判断のもと生きて帰らなければならない所であるが、情報を共有しつつ新陳代謝が行われる良い面もある。

恩田：大学山岳部のメリットは、長期の山行を重ねることで1年で登山のレベルを上げることができること、デメリットは4年でリーダーとならざるを得ない点と、経験不足や資質にかかわるリスク管理の難しさということですね。

馬目：これまでの歴史を振り返ると、大学山岳部、社会人山岳会、そしてアルパインクライミングの衰退時期を経て現在再び日本のアルパインクライミングが注目されている。その中心人物は大学山岳部出身者が多い事はとても興味深い。

恩田：最後に大学山岳部とアルパインクライミング、将来の山岳部の有り方について意見を伺いたい。

横山：難しい海外登山でも、全体に占めるクライミング自体の時間は短く90%は共同生活部分である。よって成否は生活技術と体力であり大学山岳部で培った技術と体力が必要。そして自身で考える事が大切である。やはりこれらは、10~20代で完成させてほしい。学業が多忙であることはわかるが在学中に基礎的肉付けをお願いしたい。

青木：まずは時間の許す限り山へ行ってみて欲しい。又、自由な自分の発想でルート開拓を行う事も必要。長期間、同じテントの中で他人と生活する事で他人との折り合う方法を知り人間としても出来上がる。

三戸呂：大学山岳部とアルパインクライミングを考えると大学時代はノーマルスタンダードを学ぶだけでも良い。既成ルートに登る事でも実力を試す事ができる。

横山：基礎が大事、体力・技術力・生活技術を自分で如何に考えるかが必要

馬目：アルパインクライミングを行わなくとも冬山でもリスク有り。栃木県で起きた雪崩遭難の事例もある。学生としてどこまで踏み込むか難しい。

横山：合宿でも無理することはない。マイナーなルートでも、アルパインクライミングでなくても自分たちで考えた結果であれば良い。学生には自ら考える事を求めたい。

恩田：学生の意見を聞きたい。

高井（現役学生）：今年の冬合宿に関しては雪倉岳を五輪尾根から登りたいが学業が多忙で 12 日しか取れない。学業とのバランスを考え退部する学生もいる。その辺りをパネラーに聞きたい。

横山：ノーコメントです。

三戸呂：両立はできなかった。どこの大学山岳部も同じ事情、学業を犠牲にとは言えない。とても難しい問題。大学側の理解を得るためにも現在の日本のアルパインクライミングを世界に発信し意義ある結果を認めてもらう様にしたい。

青木：同様です。

横山：本当に行きたい山があったら皆が賛同できるリーダーになって欲しい。

会場から質問：アルパインクライミングでのリスクを学生が負う必要があるか、その辺りをどう考えるか。

三戸呂：自分の実力を良く知る事と、先輩たちの記録を参照しながら考える事も必要

横山：行きたい所へ行ける様、体力と経験を高めるしかない。

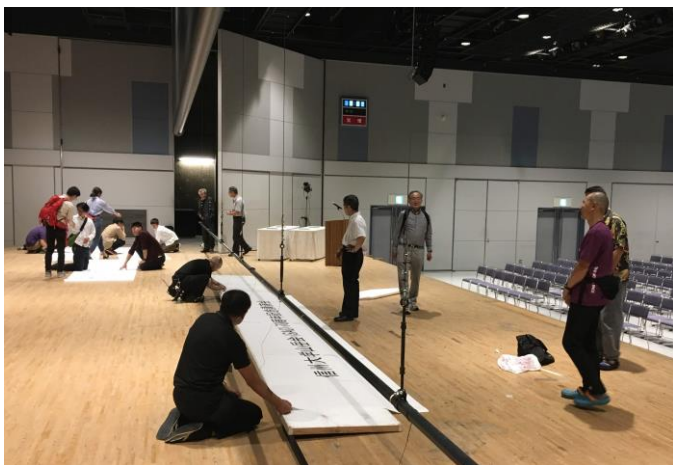
青木：対象に見合った体力と技術力を身に着けた上で

恩田：パネラーの意見をまとめると、とにかく山に入ること、しかし実力と照らし合わせてリスクを含めて徹底的に自分で考え準備しろ、ということか。

横山：追加で言えば、学生はとにかく山へ行き経験を積んで欲しい。現在の 1.5 倍くらいは行って欲しい。

●クロージング

馬目：本日は、良い話を有難うございました。キーワードでまとめるには難しいが心に迫る内容でした。



OB、学生一体となり準備、設営



会場風景

(編集：信州大学山岳会創立70周年記念事業実行委員会)